

## 教育心理学年報 第1集

明らかにした。その上にたって、どのようにすればテレビの影響をとらえられるかということについて論議した。その結果必ずしも十分な確信を持つに至らなかったが、数回の予備テストによる検討の後に、つぎの6班に分れてそれぞれ下記のテーマを分担し調査を実施した。第2次計画である実験的研究も現在進行中である。

## 433 同上 2. 研究方法

イギリスのヒンメリワイトらにならい、個人別マッチング法によりテレビ群と非テレビ群とを種々の側面から比較した。すなわち、年令・性・知能・社会階層などはほぼ等しいが、一方は家庭内でテレビを長時間視聴し（テレビ群）、他方は家庭にテレビがなく guest-viewing も少ない児童（非テレビ群）を一人ずつ対にして二群を構成し、その比較からテレビの影響を推測した。調査対象は東京都大田区の区立中学校2年生及び小学校5年生である。商工住の三地域から中学各2校計6校と、同学区に属する小学校17校を選んだ。対象数は小中各3000名で、これらに実施した予備調査に基きマッチングを行ない、小中各約250対を得、本調査を実施した。

## 434 同上 3. 興味・表現

TVは視覚的聴覚的メディアだといえるが、視覚的には特に持続的な緊張を要求するところから、視覚面を通じての何らかの影響というものが予想される。この研究ではさしあたり、同一場面での視覚的言語反応と非視覚的言語反応とのどちらを自分の感じ方に合うものとして受け入れようとするか、その受け入れ方に影響するかどうかをみようとした。更に、TVの送り出す内容が、受け手の知的関心にどう影響するか、（例えば特定の関心を高めることになるか、一般的な関心の強さを変えることになるか、など）を、各種の行為をあらわす45項目につき、おもしろく思う程度によって、7段階に評定させた結果から考察した。

## 435 同上 4. 性格（その1）

現在のテレビ番組の大半は、娯楽的な傾向のもので、児童の視聴態度は、努力によって何かを学びとろうとする創造的なものとはいえない。したがって、テレビ視聴行動は消極的（受動的、非創造的、娯楽的）行動と考えられ、ひいてはテレビの影響として受動性の増大が云々されている。しかし、これまでの研究の殆んどが、この点について否定的な結果を得ており、いわば楽観論が優勢のようである。しかし、われわれはこれまでの研究方法に満足できず、新たに Positive-Negative Test を作成し、この点について再検討を試みたものである。

## 436 同上 5. 性格（その2）

テレビを長時間視聴する児童は画面の前に長い間じっとしていると考えられるから、身体的な活動性が劣ることと関係があると思われる。従って、この点についての質問項目をつくり、テレビ群と非テレビ群の得点を比較した。また、児童の社会を見る見方がテレビ視聴によって影響されることがあるかどうかという点をみるため、いくつかの「社会観の型」についての選択肢を用意し、選択させることによって、テレビ、非テレビの2群を比較した。これについては現状肯定的態度、現状否定的態度、個人主義的態度がテレビ視聴とどういう関係にあるかをさぐってみた。

## 437 同上 6. 友人関係

テレビが児童の友人関係に及ぼす影響としては、テレビ視聴による友人ととの接触頻度・時間の変化、視聴した内容による「友人観」の変容などいくつかの面に分けて考えることができる。ここでは、テレビの視聴行動（及びその蓄積）あるいは視聴内容が現実の友人関係の中にどのように入りこみ、どのような比重を占めているかという面から検討しようとするものである。友人間の話題、対友人活動の量、対友人活動の好み、友人選択行動などの調査結果を分析して、一般的傾向を明きらかにし、またテレビ群・非テレビ群の比較を行なった。